

〔軒廊〕寝殿の南端の東端から續ける廊を云ひ、上に屋根あつて下は土間である。

こもりはつる しゆらいなきんとにせがまれて、ひしやりほんこもりはつる(虎が磨)

安りにある御進帳の「思ひを善達に翻して塵舎那佛を建立す」の「建立」に似せたのである。「それうかうか大放日にして云云」を見よ。

\*こもりようのぎよい 天子の装束(唐船飾)の御衣もあつて(唐船飾)

〔装籠御衣〕天皇の召される禮服であつて、日月景辰山龍雉火等の象を飾つたもの。

\*こもりんさい 其分では此身が金輪際まで(に)えこむともいかな、此處は(助)か(と)(聖徳太子) 金輪際の敵、悪しといふは彼奴が事(鑑鏡三)

逢初めし時の誓文を金輪際と思ひ計め(陸奥歌)

〔金輪際〕天地百六十萬箇の底、即ち地層の最底に金剛輪がある、その金剛輪の區域を金輪際と云ふ。よつて以て、底の底のどこまでもなどいふ意に用ゐる。「あらがねの」をも見よ。

こころんのおし 名將の家風かうばしき梅檀の林こころんの石、玉の光の世世永き武田の家ぞ類なき(川中島)

〔真備〕石見備前山は美石寶玉の産地である。湘山野録・曼野公撰・章藤太后神遊碑・放題に、「真山出玉 麗水生金」。平治物語卷二、六波羅合戦の條に、「舞へば梅檀の林に餘木なく、真備山には土石悉く美玉なるが如く」。

麗王の邪見云々

「擧揚が三逆も云云」を見よ。

さ

\*ざ 女は亭主と座を組みて(重井簡)おつつけ且那の引抜き牛蒡、めでたい牛蒡と座を持てば(旋舞)

〔座〕すわる場所。(座は名詞)坐は動詞。「座を組み」とは、二人以上の者が各座を占めて對してあつてゐるをいふ。座を待つとは、座をめてはやし賑やかす意。(座持)を添へる。

\*ざり 誰かある討つて出で追散せんと、采押取つて下知すれば(雲女)人馬の息をやすめよと、采振廻し呼ばばり給へば(佐佐木)

〔采〕大將が部下を指揮する爲に持つ具で、厚紙を細く裁ちて束ね、これに柄を附けたもの。采配、貞丈雜記武具之部に「ざり(又)まいは」とも云ふといふ物古は無之、源平の戦の比より室町殿の代に至るまでも無之、……ざりは武田信玄の家に作り始めしなるべし、上古の法式と云ふ事あるべからず、鷹匠の家にて山鷹クマカカのこと)を使ふ道具にざりと名付けて、竿の先に細く裁ちたる紙を固く結付けて、それを振りて鷹を使ふなり、此鷹の道具より思付きて軍のざりを作りたるなるべし。

\*ざい 時宗やらぬ逃さぬと女子のざいにあんまりな百日曾我) 嫁入する身に女のざいで只の事とは思はぬ(反魂香) 合點ゆかぬ新艘殿、女のざいに刀ざいで二階へ上り、誰に恨んで誰を斬る(蛙合歌)

〔際〕分際の際。身分。

\*さいいかく まあ待たんせ先刻の小判どうしての才覚ぞ、詮方なきに怖い事などさんせぬか(女腹切) それば至極の才覚、其金は借るか貰ふか何處から出る(飛騨)

〔才覚〕もと、オのおほえに漢字を當てて音讀したものであるとも、或は才學より出た語であるともいふ。オのよく利くこと。機智。算段。工面。

さいぎやうざくら 和歌を守りの宗匠として、西行櫻色深き(賀古教信)

〔西行櫻〕謡曲に西行櫻と云ふ曲名がある。又櫻花製品(寫本)に、此名の櫻に單瓣のもの八重のものあつて花枝の彩色圖が載つてゐる。

齋宮の忌詞 かの齋宮の忌詞、いまはしやとて道もせに、さらすからだを道者にも嫌ひ憎まれ(丹波興作)

齋宮とは未婚の内親王を卜し御杖代に定め、伊勢太神宮に奉仕せしめられた皇女を云ふ、齋宮は神事に奉仕するものなれば佛に關する語を思ふ。延喜式・神祇・齋宮式に「凡忌詞内七言、佛稱三子、經稱三染紙、塔稱阿良良岐、寺稱三瓦、僧稱三髮長、尼稱三女髮長、齋稱三片簾、外七言、死稱三依留、病稱三夜須美、哭稱三離垂、血稱三世、打稱三、安稱三、又別忌詞、堂稱三、優婆塞稱三」。この文は祭文の口調によつたもので、「齋宮の忌詞は、いまいましや」の同頭語にかゝる修辭である。

さいくわい 岬峨と響えし崔嵬の山路に疲れ(國性範)

〔崔嵬〕土山の石を聳くを云ふ。毛詩周南卷耳篇に「陟崔嵬、我馬虺隤」とありて毛傳に「崔嵬、土山の石を聳くを云ふ」。

に「崔嵬、土山の石を聳く」。

さいけ 親の敵でも出家は格別、在家となれば見返し置かれぬ弟の敵(萬年草)

〔在家〕僧を出家と云ふに對し、在俗の人を在家と云ふ。

さいしく 上も下も半死半生、血汐流れて名所繪の屏風さいしく如くなり(鎌田) 家をさいしく繪の具筆(反魂香)

〔さいしく〕彩色を四段活の動詞に用ゐたのである。いろをさ。

\*さいしやう 田夫無道の郎等まで、或は中將宰相と官位を免し召遣ふ(百合草)

〔宰相〕藤原の唐名。太政大臣を相國と云ひ、左右大臣を丞相と云ふに對し、參議を宰相と云ふ。

\*さいしやう さこそ恨み憎みし、これぞ罪障となるぞとて(卯月巻)

〔罪障〕造作した罪が往生の障りとなること。やう(柳女補)

さいしやうらう 御伴ひは鳩の杖、麗景殿の孫庇、御香をひかれしは採桑老の白衣の袖(日本武尊)

〔採桑老〕舞樂の名。老人が白衣を着し、帽後に菫葉を挿むは桑葉に擬したもので、あつた。鳩の杖をつき行歩に堪へない様にして舞ふ。

さいいたづま 紫竹交りの藪の下、春

のゆかりのさいたづま(卵丸)花(杉菜)にさいたづま(雲女)たづま(虎)をいし山野に自生し多年生草本にして高さ一二尺乃至五尺に達する。



【まづたいき】

西天の獅子王 母を圍うて立つたるは西天の獅子王も恐れつべう見え

さいなん 息杖の續かん程げんこ微座にさいなんで、ころりと腰に引つ附け(百合老)馬方編羅鼻などの符標語で七をいひ、江戸では「さいなん」といふ。巢林子のこの文は、七の符標語の「さいなん」に感むをいひかけたのである。「さ」の條をも見よ。

さいなんが妻 異國の崔南が妻の乳にて養ひしそれは姑、是げまんざら他人なり(嵯峨天皇)「崔南が妻」支那二十四孝の一。姑に仕て孝姑老いて食するに齒の無いを氣遣ひ、我が乳を以て姑を養うたと云ふ。

さいのかははら 又、こゝに賽の河原とて童男童女の生所あり(賀古教信)「私」も若いに鐵葉つけて、のがれし賽のかはら町(卯月杵)【賀古教信】に賽の河原とて童男童女の生所あり(賀古教信)私も若いに鐵葉つけて、のがれし賽のかはら町(卯月杵)【賀古教信】に賽の河原とて童男童女の生所あり(賀古教信)私も若いに鐵葉つけて、のがれし賽のかはら町(卯月杵)

さいのめ 馬草刈場の領界(さいのめ)に立ち祭文を語つて鐘を乞ひ歩いた。延寶頃

は地蔵菩薩の御袖下に隠れて身を免るといふ。開田耕華に「賽の河原。紀伊郡山城佐比の里にあり、三代實業貞觀十三年百鬼葬送の地を撰定せらる。其一處紀伊郡十一條下佐比の里とあり、世に佐比の河原を冥途にて小兒の集る所とし、且地蔵尊之を化益し給ふといふは、其葬地に小石塔多ありしよりいふならん。卯月杵のこの文は「賽の河原」に「瓦町」をいひかけたのである。

西方極樂淨瑠璃 南無阿彌陀佛疑ひなき西方極樂淨瑠璃に語りて(女腹切)

さいはひびき 武田の幸ひを子孫に受けて(五人兄弟)「幸甚」紋所の名。

さいばら 風俗催馬樂朗詠も玉簾ふかき聲もれて(蛙合戦)【催馬樂】も里巷の調歌であつたが、これに詩を定めて詠ふやうになつてからは終に高貴の人のものでもあそびとなつた。郭曲秘抄、然而後好事之士、取以爲三理琴歌、故其歌因來甚有古代、有中世、厥後更率諸國、謂之風俗、又後代詠詩謂之今久矣。催馬樂、風俗固是一也、遂歸於宮中已久矣。催馬樂の名義につききては、昔神樂の餘興に詠ひ興じたるものにつき、催馬樂といふがあつた。催馬樂は「さいはり」から起つた語である。(さ)に馬をかり催する歌、馬士歌であるとの説は甚しい誤である。



【しびひはいき】

棒木真中に轉伏したる女の死骸(女夫池)【さかひら】(境目)の約縛境界。井原西鶴隨筆「さかひら」に「東隣へは無理ひかかつてさ目論も濟まぬに、遊山に出るは氣遣ひの沙汰なり。」

さいもん おおさればいの、せめてききか居たらば祭文を聞かうと(今宮)我噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、坂町邊のな通り筋(生玉)

【祭文もと説經から出で、神佛の物體ないことなどを綴り、説諭して手向としたものである。つたが、室町時代の末頃になつては、似非坊主が狂言筒語を交へて語り、その讀辭が發達して歌祭文節となり、萬治前頃に既に山伏めいた乞食坊主が、錫杖振立て門



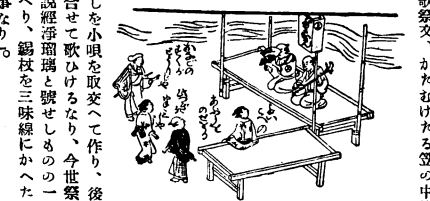
【佛厄】 【文祭】

に立ち祭文を語つて鐘を乞ひ歩いた。延寶頃寄の祭文の類ができ、ついで死刑や情死や好色等の其當時の出来事を綴り、あはれげな聲を張上げて賞り歩き、生玉あたりでは童男童女の中、祭文を語つて聞手から鐘を集めるものもあつた。素人も暇み口腹似する者もあつて、一時盛んに流行したのである。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)に「祭文。此山伏の所作

祭文といふを聞けば、神道かと思へば佛道と、其本據定かならず、伊勢兩宮末社に四十未社百二十未社などといふ事更になきことにて、此事神道問答といふものに記せり、……江戶祭文といふは白壁にして、力身を第一として歌淨瑠璃のせすといふ事な勿體なし。西鶴撰 細前狂言實水二年刊)卷之三に二十斗のあつばん男二あがりの三味線、十八九の振袖つれ頭の琴のおと、野良者寄の歌祭文、かたむけたる笠の中能く

能く見れば、娘のおはつにまきれな(云云)とあれば、賢永初年頃は既に三味線琴の鳴物入で歌祭文を語つてゐた、聲曲類彙五に、【祭文】は山伏の態なりしを小唄を取交へて作り、後又三味線にさへ合せて歌ひけるなり、今世祭文と號るは中古説經淨瑠璃を號せしもの一變せしものといへり、錫杖を三味線にかへたるも中古より事なり。

巢林子の文中に祭文の文句や口調を應用した果かなり多くなり。賀古教信七藝詞に「そもそも歌まて花を眺め奉る、上は梵天山櫻初徳兵衛の、その腕の夢も破れ、まだ間もないに云云」とある血死助の道行中の文、吉野忠信に「清土拜取まつて申し奉るの色は、根本木太照云云」とある女郎寄の文、丹波與作待役のこむろぶしに「小萬は泣く



【觀所(刊年三保享)細羅白室後】

ヨイ申すやう、識は異なも其の時に、起請  
「一枚書かねども云」とある與作小萬路の  
駒中の文、大經師昔應に「おさん茂兵衛にい  
ふやうは、由なき女の怪氣故、何の科なきも  
なたまで云」とある巖城しの文、雙生偶田  
川に「被ひ清め奉るの釋迦は、羅薩羅の親父  
にて、布袋は唐子のお乳母役云」とある狂  
女道行中の文、心中宵庚申に「懸名つけて世  
の人の、わらびませうが笑止と、悔めば夫は  
するきの涙云」とある青物盡しの文などは、  
皆祭文の利用である。

**\*さいりやう 宰領どもさあ御立と**  
〔華領〕荷物を馬に載せて運送する時、之を掌  
り行く者をいひ、馬四五駄に宰領一人附いて  
行く。宰領の乗る馬を空尻馬といひ、荷を  
軽くして宰領も乗る。「からじりやう」をも  
見よ。

**\*さいりく やいここな才六**  
め(加増曾我)  
〔才六〕げさいりくを見よ。

**さいをうがうま** 「人間萬事妻翁が馬」を  
見よ。

**さいん** 市中を離れし坐隠の遊面白  
し(國性爺)

〔坐隠〕國性。世説新語補 卷十六 巧藝に、王  
中郎以園茶是坐隠、支公以園茶爲手談」

**\*さう** 三度飛脚の江戸のさう、待つ  
夜も漸う更けにけり(冥途飛脚)

面の待ちしれし大暮打たせ鎌倉のさ  
うを待たせり(蛙合腰)

〔左右〕通知。音肩。倭訓栞に「さう。俗に消  
息をさうといふは左右の音也、禁秘抄に不  
し及左右と見え、物にさうなくなど見え  
たり」。

**相懸經に曰く** 「鶴は一百六十年にして云  
さう」に見よ。

**さうけつ** 文字のはじまりは、若頭  
といつし者眞砂に遊ぶ濱千鳥その  
足跡を見せしめしより、鳥の跡絶え  
ず代代に傳へて實とす(三世相)

〔著論〕支那實帝の時の人、鳥の足跡を見て文  
字を創作したと云ふ。事物原始に「著論觀  
鳥迹」因遂滋、則謂之字」。

**\*さうざうし** 上として民のあはれ  
をしろし召さぬいとさうざう  
し(殿大臣)

〔さびさびし〕淋淋の音便。ものさびし。  
心細し。

**\*さうし** 關の小萬も草紙にある繪  
で見たよりは好い女房(丹波與作)

**\*さうし** 鈴木の三郎重家は院宣を  
首に懸け、御曹司の御跡を慕ひて  
奥へ下りしが(孕常盤) 鎌倉の頼家  
の御曹司は鳳岡の賢聖の障子をま  
なび(五人兄弟)

〔曹司〕つづねの義。部屋住の公達を御曹司  
と云ふ。貞丈雜記 卷十四に「曹司といふは  
家を長くつづねて幾仕切にも仕切なり、曹  
の字はカギルとよむ。司の字はツカサトルと  
よむ、役所をしきる心也、今用部屋といふに  
同じ、又云く、近世未だ家督をとりあらずして居  
るを部屋住といふは、則ち御曹司と云ふと同  
じ心なり」。

**さうしうもの** 床に置かれし一腰  
の、好き折紙の相州物の、中に取  
つても出来心(靈女)

〔相州物〕相州鎌倉の刀工岡崎五郎入道正宗の  
流派の作の刀。正宗は正應嘉應年間の人、刀  
治中興の祖神と稱せられたといふ。

**さうじ** 一代の勳功騷人の筆を光  
し(日本武尊)

〔騷人〕詩人をいひ、騷は怒の義。正字通に、  
「屈原作騷、音遣臺也、今謂詩人爲騷人」。

**\*さうなし** 景清は飛鳥の術を得た  
れば、左右なく討たれんやうもな  
く(出世景清)

〔手〕十二人の主従さうなう關  
を通過したべと(探勝)

〔左右無難〕しない。わけない。「さう」を  
め見よ。

**さうふ** 穢れを洗ひし水なれば牛に  
かへじと、牽歸るは昔の巢父許由  
にも非ず(川中馬)

〔巢父〕支那上古堯時代の隱者である、堯帝が  
國を許由に譲らうとしたのを聞き、國など欲  
しくも無き、耳が汚れたとて、颯川で耳を洗  
つた。巢父、水を見、さうな汚らわしい事  
を聞いた耳を洗つては、その水も濁らわしいと  
とて、牛に水を飲ますのを止めて牽き歸つた  
と云ふことが、故事類聚・隱逸部に見え、平治  
物語・光朝卿夢内の條にも見えてゐる。

**\*さうぶれん** 夫を思ふ想夫戀、み  
もひも寒しと謠ひけん、昔覺ゆる  
木枯に吹合せてぞ聞えける(孕常盤)

〔想夫戀〕平調の雅名。謡曲・小管に、「夫を  
想ひて戀ふるの義、想夫戀なるぞうれしき」と  
見え、淨瑠璃十二段草子に「女は男を戀ふ  
る樂、男は女をしのぶ樂、想夫戀といふ樂を  
こそ人目も憚らず云」と見えてゐれども、

徒然草第二百四段に、「さうぶれん」と云ふ  
樂は女男を戀ふる故の名にはあらず、本は相  
府連へ文字のよがるなり、晋へ王極大臣と  
して參に遊、を植まて愛せし時の樂なり」と  
あれば、もとは相府連と書いたのである。孕  
常盤のここの文の「みもひも寒しと謠ひけん」、  
昔覺ゆる木枯に吹合せて」とあるは、借馬樂歌  
と謡曲・小管とによつていうので、謡曲・小  
管に「木枯に吹合せてる音をしるなどの文  
がある。(序云、相府連は音樂あつて舞が女  
い。支那の相府の蓮蓮の名所を説つたもの  
だと云ふ。)(みもひも寒しと謠ひけん)」

**さうまき** 大口の切袴(國性爺後日)

まきまき兵庫の丸袴(國性爺後日)

まきまき箱巻の袴、短刀をさきまきまき  
巻十二、刀敷之部に刀さきまきまきまきまき  
腰の物腰刀、皆一物にて、古人常にさしたる  
短刀なり、今の人のわざさきまきまきまきまき  
さうらう 天台の教を學びさうらう  
に心を寄せ(兼好)

〔莊老〕莊子と老子。老莊の哲學。

**\*さが** 世を過れても所がら我身の  
さがの竹がこひ(三世相) 男のさが  
を顯はすまいと、隨分わしが身を  
つめ(夕鶴) どうぞなさがの立たぬ  
やうに誓ひ取りやうあるべきと  
(天鼓) 誓の字をさがと讀む訓あ  
り(縁頼天皇)

性ならはしの義より轉じて、悪性、悪  
理、險難の意に用ゐる。易林本節用集に「無  
し悪」と和訓栞に「さがは日本紀・祥の字、善  
の字性とも訓せり、直をスグとよみ、清をス  
ガと讀むも皆通せり、祥・善・清・直・本性の徳  
なること知るべし、孝徳紀に誓の字をさがと  
讀めるは僻也」十六夜物語(古淨瑠璃)第四に

「さて情なや斯様の體となりたれば親子のまがをも顯はずかや」。同第五に「浮世のまがの露霜に墨の袂をほりしは」。

**さかおくび** 思つた事言つた事今はあたなる逆狂、三寸落しに裁ち切つて(薩摩歌)

「逆狂四つ身の仕立には、本裁のみごろから襟と衽とを取り、その衽を逆用ひて幅を廣くするをいひ、肩先から衽先までを三寸に仕立てる。

**\*さか**し 靈鳥いかんぞ時のさがしきに逢へる(女護患) 繼母といふ姑のさがしき願志の牙にかかり、稚き娘は食殺され(賀古教信)

**\*さか**しほ 禁酒する人がさかしほと名づけても飲む口は同じ酒(蛙合戦) 扱ここな人はこの盃に二十や三十、身が爲には酒しほ(鎌田)

五月四日の夜着し出でたる己れが、所所のきは付きこはばり、大理の廳より御不審、只今證據の實否、己れが命生死二つの境なるぞ、誰かある酒酒、あつといふより銚子燗鍋手ん手に引提げ、さらさらさつとこはしかけ、……、酒嚙(變じて)朱の血しほ(女殺)

「酒嚙食物を煮る時に味をよくする爲に加へる酒、またはその酒をいふ。狂言(笠下)に御坊は禁酒にてはござらぬか、いや酒しほとて苦しからぬ」。

この文は、與兵衛が五月四日

さかおくび——さがまつたけ

の夜お吉を殺し、その血に汚れた與兵衛の袷をそれから三十五日経過して、その汚れた酒を注ぎかければ、朱の血汐になつたといふのであるが、思ふに酒の暗黒色にみれるを朱の血汐にする能力はないやうである。さればこれは果林子が文飾に過ぎぬものと見ねばなるまい。元來人類の血液が赤色を呈するも、動脈血の鮮紅色なるはこもの多量にある爲で、静脈血は炭酸に富む爲に暗青色を呈し、血液が衣類等に附着して古くなる時は暗黒色に變じ、それを血液として證明する爲には、その小部分にクロール水素の如きものを作用せしめて、一種特有の結晶物即ちヘミン結晶を品出せしめて、血液たることを證明せしめぬものであり、また血液として人類の血液が他動物の血液の差異は、赤血球の核の有無、又は赤血球の大きき等によつて區別されるもので、これも色彩の如何によつては區別されぬ。近時は血清學上の基礎の上から種種の檢出方法あれど、これも色彩の濃淡には關係がない。血漿に酒を注ぐといふは、血液の成分をなせる蛋白質にアルコールを作用せしめるといふことになるが、この間の反應は又色彩には關係がない。以上の點よりして果林子の書けることは、科學的には説明困難である。

**さかたきんひら** 「きんひら」を見よ。

**坂田藤十郎** 坂田藤十郎が夕霧を一度見たいと思つたが(淀鱈)

元祿頃(於ける)上方の名優である、濡れ事に長じ傾城の狂言に妙を得た。延寶六年大阪の荒木與次兵衛座にて夕霧名優の正月に、藤屋伊左衛門に扮して盛名をどろかし、寶永六年六十五歳で歿した。彼は龍門左の狂言本を上演して、門左との關係深く、門左もまた

彼の藝術によつて隆盛されたことが多かつたであらうと信ずる。

**さかてざくら** 櫻襲の袖(襲)へし、さかて櫻に白木綿纏ひつか(賀古教信)

「逆手櫻岡空蓮鑊の櫻品に、單纏で色澤赤く、六鑊ある内一鑊よちれてある故、俗に逆手櫻といふと記してある。果林子のこの文は逆手櫻に天の逆手を打つ(その條を見よ)意をいひかけたのである。

**さかてをうつ** 太刀を口にひつくはへ逆手をうつてぞ泳ぎける(天神記) 餘所にみるめをかづきする海人も逆手を打休か(曇明寺題) 爪は牡蠣やすみ(女護患)

「逆手を打つ」海水中に潜入るときに、逆様になつて手で水を打つて行くをいふ。野野口立圓編(言葉よせ(入本)に、「あまのさかて。海に入時波を打て(入)を云也」。

**\*さかねだれ** かへつて今の逆れだれ口惜しや(曾根橋) 「逆強請此方から問責せうとして却つて彼方からやり込められること。逆振。

**\*さかのしやか** それ(は)それ(は)よい女房のしやかにもいかにも嵯峨の釋迦(生玉)

「嵯峨の釋迦」嵯峨の里の清涼寺にある釋迦像をいひ、赤梅纏で作つてあるといふ。新增大鏡波集(寛永二十年刊)に「佛も物をおびたまふなり、嵯峨の釋迦しやくせんだんと聞くからに」都案内書(寛文十一年刊)巻四に「さがの釋迦堂」二は嵯峨の天皇の離宮なりし、齋然法師入唐ありて、びしゆかつまが作りししやくせんだんの佛像を傳へ、歸朝して

奏聞をとり、皇居をあらため寺を作り、すなはち清涼寺と名づけ、佛尊を安置せらるなり」しやくせんだん これを酒林といふ。

**さかばやし** 前髪(の)酒林で殿を酔せし男傾城(反魂香)

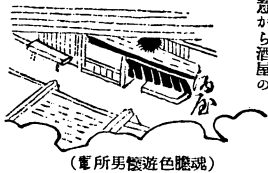
「酒林昔は杉の葉を集め丸めて軒に吊し酒屋の標にしたたこれを酒林といふ。酒林は態を掃去するの意から酒屋の看板にしたもので、そのもとに掃である。御寺遊筆巻四に、「地村間以草爲(帶)實於竹竿、標」於大木之上曰酒屋子。この文は、若衆の前髪を束ねたのを酒林に云ひなし、男色によつて殿に取入つたのを云へるにて、「酒林」酔はせしは戯語である。

**\*さか**ほ 萃原や天地人も開けそめ、榮えにけりや逆子の雲の、玉水のかかる時しも生れ來て(振袖橋)

「逆子」諸冊の二神天の浮橋に呑み給うて、御子の石を上にして逆様に下し給うた故の名。謡曲逆子に「天の浮橋に二神たえずみ給ひ、この御子を海中にさし下し給ひよ、御子を改めて天の逆子と名づけそめ云云」。

**さがまつたけ** 嘉平次は嵯峨をばなれし嵯峨松茸(生玉) 汲立の京の水が心に叶はぬ(酒香重)

「嵯峨松茸(山城國葛野郡嵯峨)の松茸は名物である。黒川道徳編(白文紀事(延寶年中成)九月の條に「凡松茸所外所有之、其中謂安寺山(嵯峨山)所産爲美」。さがをはなれし嵯峨松茸」の松茸には、陰置をきかせた酒落で



(酒所男遊遊色艶麗)

ある。

さがまんちゆう いはれぬ愛宕糍<sup>もち</sup>りたべつげた嵯峨饅頭、むつくり擦つて貰(う) (三國志)

〔饅頭〕山城國葛野郡嵯峨を製造する名物の饅頭。この文は小野のお通をかくいうたのである。

さかむかへ 盛長仰を蒙り御さかむかへと聞えける(烏帽子折) 諸國賤の人込みも、皆本復て歸るさは、坂むかひ湯や送り酒(百合若)

〔坂迎〕香官などの知普の者を粟田口に送る、また其歸るときを逢坂山に出迎へること。よつてまた、人を途中で待ち受けて饗應することをいふ。和訓栞に「さかむかへ」坂迎の義京師の人容留せしを歸路に迎ふをいふ。其もと東へ下る人の歸りを逢坂まで出迎ふよりの名なるべし、云云。〔坂迎ひ湯〕とあるは、有馬の湯場から本復して歸る人を待ち迎へて饗應すること。蓋し坂迎は酒迎の轉義。

\*さかもぎ 貫の木逆茂木押破り(國性爺)

〔逆茂木〕榊木を逆立てて垣とし、その木を杖に結び付などして敵の侵入を防ぐもの。武家名目抄に「サカモガリはサカモギの配りて延びたるなれば、一つのものなるべきを、枝ながらの木を引並べたるを逆木と云ひ、竹を結びわたしたるを逆虎落といふことにはなりたり。

さかもどし 其禮として日くさり金樽代としてよこした、酒戻しはせぬもの故まあ受取つて置いたちや(露門松) 飲んだ酒を返せとは法を知らぬ侍殿、酒戻しはせぬもの(川中島)

〔酒戻〕酒戻しは逆戻しと訓相通じることよつて之を思ふ。

\*さかゆく 勇んでうたふ鶯の、さかゆく末をぞ祈りける(本領曾我)

〔發行〕さかゆく。

さがるめ いつあな海苔もかたのりや(出世景清)

〔相良和布〕海濱瀧和布の別稱であつて、邇州相良の名産なるによつていふ。園花萬葉記卷八、邇州名物の條に「堀布より出る」食用となりまたこの植物を焼いて其灰から灰度を製す。この文は「身のさが」を「さがらめ」にいひかけたのである。

\*さか 池水を東西にさかつて立別れ(蛙合戦)

〔蛙〕はなれる。隔てる。和訓栞に「さかる」萬葉集に離ノ字、放ノ字、日本紀に疎ノ字などよまゝ、裂の義、かる反く也。

さきいき 正しうもない銀を取り、伴ひつきあふ己れがさきいきせうと思ふか(水朝日)

〔さきいき〕さきいきを見よ。

の福草よりして祝ひ物にする故によみしといふべけれど、この歌も定めてさきいきの三つといはれ冠におきたるなるべし。三つは四つばといへるは、三枝の三つはより四つばと歌をいひつづ、三つ軒端四つ軒端にひかけて三枝四枝をさかせるもの。

先立ち失せし心中 先立ち失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へと志し、二三町こそ走りけれ(卯月紅葉)

田で情死した者を云ふのであるが、さて何人であるか詳でない。紀海音撰、鞠田心中に、老松町節聞屋彌市と曾根崎新地萬屋の抱妓お高とが梅田橋所で情死した事を記し、外題年鑑にこの浮瑠璃の上演を寶永三年四月初日とある。されどこの梅田心中の文中に今官心中のことが見えてゐる。今官心中は外題年鑑に寶永六年の出来事を同七年に上演したことになつてゐる。これでは寶永三年四月初日に情を成す難く、従つて彌市、お高の情死を寶永三年四月初と断定することができない。序云、お高の死を寶永三年の夏以前としたわけは、卯月紅葉の上演が寶永三年夏であるからで、それによつては「四郎五郎」の條を見よ。

さきゆき 新七を足にかけて踏んだの罰忽ちあつて此仕合、身のさきゆきのすることは今生で思切つたぞ(淀屋)

〔新七〕は「さき」は榮える義であつて、花に開くこと。「さき」は榮える義であつて、花に開くこと。「さき」は榮える義であつて、花に開くこと。「さき」は榮える義であつて、花に開くこと。

さくろり こは何とせんあさましやと、馬のさくろりに身を投伏し、大

要覽に、「五分律云、爲護身護衣護三僧袈裟故著座具」。この文は禪立を座具に代用したといふのである。

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

〔座具〕僧侶が勤をする時に座下に敷く物で、織物で作り、行く時は袈裟の下に携ふ。釋氏

聲上げて歎きしは(加増有枝)

〔疏〕騎射のとき馬を離る爲に馬場(馬場)に掘つた溝。安多武久路(仁)に「其場(馬場)の内は一面芝地にて、挟物射習ふまきは長き三町ばかり、横に廣きは四五尺ばかり、芝を掘りおこして砂を入らる。又笠懸射習ふ疏は長き一町ばかり横二尺ばかり、これも芝をおこし砂を入らる。

\*さげあま 顔も知らぬ夫の爲さげあまの身となり(薩摩歌)

〔下尼〕頭髮を切下げにした尼。さげあま。垂用。

\*さげぢう 提重開き幫間ども(二枚繪)

〔提重〕食物・食器を徳利をも容れ、提げて行かれるやうに作つた提重箱で、詩繪また書目で懸らたのもあつて、貞(女用訓蒙圖書所載)草・正徳頃流行した物である。提重の一種に覺覺提重と云ふのもあつた。(ぬぎめさげぢう)を見よ。娯遊笑覽卷二下に「さげ重といふ物



〔重提〕



▲じくて品よき方には、今は坊間などに、は廢れたる物なれど、五人づめ七人づめの△辨當とおな、△辨當箱ありて古道具屋に出で、賣ふ者もなければ組入たる膳提重箱一品づつ分ちて賣る、よき膳箱したるなど往住あり、これ等皆提重なり。

酒漬 酒漬に水も盡くかや我宿へ、歸りこ入屋の徳兵衛忙しげに立歸り(重井簡)

酒に漬かること、酒漬に水も盡くと、色茶屋の酒に親しみ漬つてゐては活計が立たぬと

の意、水も盡くは、この後の文に「これでは水も吞まれぬ」とあるに應じ、活計が立たぬ意にうたへたのである。

\*さげもの 鏡前を叩破り提物差換取出せば(歌念佛)

〔提物〕腰に提げる巾着・印籠の類。

ささづ 今来る春にささづよの、面白く有難やとこそ植ふにけれ(天智天皇)

〔咲かうと智〕の約。

\*ささづ 先お上りなされませ、いかう冷える、ささづ一つそれ爛つきやとありければ(重井簡) 母様も叔父様も奥へ御入なされ、ささづでもあがりませと(壬生大念佛)

好、酒を笹といふわけは、古詩に「竹葉清香、何妨欲飲杯」と見え、白居易の詩に「煮頭竹葉煎」春熟などとあるに本づく。伊勢貞丈は「ささづは三三であるとしてゐる。三三九度の御酒」を見よ。

\*ささいがら ええなまぬるい且那樣と、たぶさを取つてささいがら二三十くらばせ(大經師) 内に尻が据らぬとて、ささいがらの五郎介と土地で異名が、附いてある(大經師)

「ささいがら」は「螺螺」の訛。「螺螺」二三十くらばせは「螺」擧で「三十打掃したと云ふのである。螺螺は擧、擧のこと、其形が似てゐるより云ふ。「ささいがら」の五郎介とは、出歩いて我内におちついて居ないから、渾名したので、螺螺の尻は螺螺状になつて尖り、据が悪いからしか名付けたのである。

\*ささえ 嫁菜のひたしに豆腐の煮しめ、ささえでも致しまして(反魂香)

彼奴にささえの食事を與へ(冷泉節) 折折破子小竹筒を參らせ、戸障子床の敷物まで兎や角まかなひ候(大經師)

「小竹筒」酒入の約であらう。竹筒を細工したもので、酒を入れ又は食物をも容れる器。和訓彙に「東鑑に小筒をよめり、小竹枝の義なるべし、酒器也、庭訓往來に小竹筒に作る」と和漢音釋書言字考七に「小筒又偏短、盛」酒器。

ささいがら 「ささいがら」を見よ。

\*ささがに 二階には消ゆるばかりにささがにの、絲に懸れる身の命、露の便りの危さよ(卯月紅葉) 歸る家路を松蟲や、さらば笹原笹蟹の、秋に染絲くり出し(二枚繪) 柳の絲にささがにの蜘蛛の振舞(釋迦)

蜘蛛。ささがにの小蟹の義といひ、また笹原に住む蟹の意とも云ふ。もと「ささがにの」と云うて蜘蛛の枕詞であつて、衣通姫の歌にも「我青子が来べき宵なり、ささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるる」と見えてゐる。ささを「ささがに」を直に蜘蛛にうたはしたのは、既に古今集巻十物名部にも「白露を玉にぬくと見えたる、花にも葉にも糸をみなへし」と見えてゐる。柳の絲にささがにの蜘蛛の振舞」とあるは、「ささがにの」を「蜘蛛」の枕詞に用いたのである。「我せこが来べき宵なり云」を見よ。

佐佐木源三 佐佐木源三は二君にも仕へす(櫻樓の肩を裾に結び、頼朝の御代を待ちしは心の錦(庚辰甲) 佐佐木源三秀義は保元の亂に源義朝に従つて

白河殿を攻め、平治の亂に源義朝に屬して平重盛の軍と戦ふ。義朝が死んでからは郷に歸り、平家に屬するを肯じなかつた爲に、所管の地を奪はれて辛苦を嘗み、源朝朝兵を擧げやこれに應じ、壽永三年平家の臣平田家經、近江國大原莊に戰つて死んだ、行年七十二。

ささふ 今若は御覽じて、これぞ源氏の氏神に我門出の吉相と御手を合せ給ひければ、兄を見真似に乙若も牛若も母君の乳房の上に手を合せ、ささふささふと愛らしき(烏帽子折)

「ささふらふ」(左候)の略。さやうに候。「さふ」も見よ。

ささぶね ここは古へ業平の、思と戀と兩國に笹舟流す河内路や(三世相) 熊笹ちぎり舟こしらへて、淋しき流す笹舟の(井簡)

〔笹舟〕竹葉で造つた舟。夫木集に「うらなみ子が流れに浮ぶるささ舟の」とまはりは多の水なり。

\*ささいぐち かげ言中言ささへ口、立つてはふすべ居ては譏り(卯月紅葉) 直に仰せ上げられては某がささへ言申せし様に迷惑千萬虎が(廢)

〔ささい〕支言に同じ。謔言。但言集卷に「ささい」の口言をササへと云、彌都の義也。

ささめ 起きつまるびつささめして相撲取草思出す(用明天皇)

〔蓬草〕草に似て芽より小き草の名。和訓栞に「蓬草に似、國民ささめのみといふ、芽の類にて編て蓋し、又は睡とするものなりといへり」。この文は「ささめ」に私語をいひかけ

たのである。

\*ささら あつと涙の玉ささら、唄ふ聲にも血の涙(夕霧) あつと涙に摩るささら、鼓弓の絃も細き聲(反魂香)

〔影〕竹で脚を作り、刻みある木竿と相摩つて音を發せしめるものである。謡曲自然居士に「夫れささらの起りを探ぬるに、東山にある細僧の、扇の上〔葵川師宣畫(延寶五年)〕に木の葉のかりしを、持ちたる歌珠にてさらりさらりと拂ひしより、



ささらといふ事始まりたり」とあれど、もと支那の古樂器の歌から出たものであらう。問の山(その條を見)の唄を詠ひ、または歌祭文や門談經にも歌を用ゐ、三味線まはは胡弓と合奏してゐた。

\*さし お袋様とさしで是はいかがなり、あの御座敷へ参らん(堀川波鼓)

\*さしがへ 用意し置きしさしかへに、夫の白き帷子緋縮緬に結び下げ(卯月調色)

\*さしおがみ これの小萬に就いて代官所のおさし紙(舟波與作)

〔差紙〕差しは名を指して呼び出す義。官から人民を呼び出す召狀。

\*さしぐし 刺櫛我門の律の歌(源義經) 〔刺櫛〕備馬樂の律の刺櫛の歌。さし櫛はとうまりなりとありしかとたけののせうの朝に。さしとうよりさりと取りたけは挿櫛もなし。

\*さしこはらす 大斷臘差しこはらし(持統天皇)

さしこはら 差しこはら(差通)の轉指して堅固に身構す。さしこみ 皆おか様のさしこみと、思ふも地體(ちたい)のちの無理(重升筒)

\*さしは 刺櫛(櫛を背から切開いて鹽漬にしたのを、二尾一つの串に刺したものをいひ、越前能登あたりから京阪地方に賣出したのが多い。この文に皮鯨)とあるは、鯨の皮部にあたる脂肪を鹽漬にしたものであつて、多くは吸物などにして食用に供したのである。

\*さしぞへ さしぞへ(抜いて草切り拂ひ)(松風)

\*さしづ 未だ指圖繪圖の巻物、傳授口傳許し印可を請けされば(鑑權三)

\*さしつたり 有風飛掛つて入鹿が真中刺通さんとする所を、さしつたりと引げつし、腕首に絶付くを向へがばと突倒す(大鑑冠) 打碎かんと敵の勢一度にどつと亂入ればなぐり立て(國性爺) 太刀を逆手に突けども斬れども手答へなし、さ

しつたりと取直し、切つて放す忍の緒(振袖始)

\*さしぬき 金色の指貫裾を曳いて銀笠の眞羽の矢負ひ(松風)

〔指貫〕奴袴とも (北野稿草所載) 〔眞羽〕矢負ひ (松風) 〔直衣に指貫をはいた姿] 書く。裾に穴あ

つて緒を通し 〔指貫〕長袴であつて、後に腰ばな

る。中古公卿の人などは直衣袴衣の下に綫織物の奴袴を穿いたものである。

\*さしは 扱御鷹はこりみ(百日曾我) 〔鶴橋大さ馬程な小鷹の一種で単の鷹である。よく鴉やその以下の小鳥を捉ふ。)

\*さしほらす 大太刀前下りに差はらし(酒吞童子)

差しはら 差しはら(酒吞童子) 差しはら(酒吞童子) 差しはら(酒吞童子)

\*さしむぐさ 十四の灸に水が湧く盛りりの女盛りりの男、手を締め身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、これぞ因果の皮切なる(今宮)

\*さしやくわ 駒形破現を見よ。 〔駒形破現〕を見よ。 〔駒形破現〕を見よ。

\*さす 事介はちとわ寺にさす ことがある、母様の今、藏にござるまに早う出たい(薩摩歌)



〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

\*さすが 腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世

〔差さす〕腰のさすが引抜いて既に小指に押當つれば(雷門松) 出見世





て通ふ里雀、忠兵衛ばとぼとぼと(冥途飛脚)

「里雀(い)色」里をぞめき歩く者を雀に喩へていふ。この文は、梅川を籠の鳥と云うた縁で里雀とつづけ、そして雀の鳴聲チユウチユウに忠兵衛をいかけた、いつものながら輕妙の才筆である。

さな 首尾よからうば鏡前さな(此船廻し博多小女郎渡船) 上方さな(突走(博多小女郎渡船) おんどもが脇腹さな(當るが最期、ひつつまんで壁へ腕摺らうと思つて(博多)

「さな」(様)の訛。方向を示す助詞へと同じやうに用ひ、長崎地方の方言である。現今長崎地方では「さな」とは殆んど言はないで、「さん」または「さへ」といひ、熊本地方でも用ひられてゐる。越谷秀實編、物類稱呼卷五言語部に「東へ西へ」といふ事を肥前にて、東さなへ西さなへといふ。

さなか 十何兩とやら昨日渡る筈ぢやげな、請取も往つてあるとのこと、大事無か私に渡さんせ、さなかまちつと酒でも飲んで待たんせ(生玉)

「さなか」は「さな」のつまつた詞。さななれば。なほこの文に「大事無か」とあるも「大事無くは」のつまつた詞である。

さなへつき 簀と舅の挨拶の中にふし立つ早苗月(卯月紅葉) [早苗月稻苗を苗代から田に移す頃の月の義。舊曆五月の異稱。]

にて装綴したる斑白絨の鍔を着(最明寺殿)

「札」綴は皮を造れる小さい板の如きもの稱で、これを繕きたは革紐で綴して鍔を作る。

さなかつら 我黒髪(の)されかつら、逢坂山にぞ着き給ふ(蟬丸) され葛丸人に知られて、こいこい(千正犬)

「美男葛丸山野に自生し木質常緑の蕨生植物で、葉は楕圓形で光澤あつて厚く、花は帯白色、果實は赤い小珠状漿果の集合より成る。莖には多量の粘液を含み、その粘液を頭髪に塗付ける用となす。この文は黒髪のもつれたらにさなかつらにさなへつき。



「さな」は小聲に通はして男女相聲する意から逢坂山にいひつづけられたのである。小倉百人一首・三津右大臣定方の歌に「名にしおはば逢坂山のさなかつら、人に知られて来るよしもがな」。

さば 二十あまりの若僧行に寝れし姿にて、普供の生飯を盤に捧げ(岩波)

「生飯」梵語 Sattvahana を禪家に生飯と譯し、宋音に讀んで「せんぱん」と云ひ、略して「さば」と云ひ、田衆生食の語に基く。食事をする時にまづ少分の飯粒を分つて鬼界の衆生に施すを云ふ。俗に三度に分つて三寶と不動明王と鬼子母神に供するものとされてゐる。

とご様の御差配で今の間は我らと夫婦(松風)

「座配」挨拶や身振などの所作を云ふ。應對の座に於ける所作。北條圃水撰、日本新水代賦卷六に、「野郎傾城ささて面白き物にあらず、むしうたし姿、花車の言葉座配の珍しきを見る故に、我宿の妻とは格別に違ひて魂を奪はるるなり、彼等も内語のふだん姿をそれは見苦しき事なり。太平色番匠・卷一に、「大臣も男劣に遊ばず座配をはづませ、折からにはいたつたる口。錦文流撰傾城八はながたに、「先第一は人に採まれ、さはい品よくきればなれ、しやんとて扱ひんとして。」

さばきかみ 西橋詰の髪結床よりさばき髪の若い者楊枝くはへて来りしが(堀川波紋)

「別髪」鮮き散した髪。小町節に、「梅が香やとめん柳のさばき髪、卿。」

さばききやう 杜若・根芹・澤瀉・澤桔梗水にまかせて染めしもよ(吉岡染)

「澤桔梗」水邊に自生し高さ六七尺に達し、葉は柳葉に似て細鋸齒がある。秋の頃五輪碧色の花を開く。この文は澤桔梗を



染模様にしたのである。さばしる

「砂鉢」易林本、節用集に、「砂鉢」とあつて「砂」と註記してある。されば水晶の皿のやうな目玉をむぎだすことを「眼は砂鉢」と云うたのである。和訓栞に「さばち。磁盆をいふ。砂鉢の義なるべし、凡て淺なるものを沙といふ。沙灘・沙船の類是也といへり。合類大節用集(享保二年刊)に「砂鉢。支那所調磁盆。」

さばへなす さばへなす疫神(堀橋結) [五月蠅成「五月蠅なす疫神」とは、五月蠅のやうに騒ぐ疫神。萬葉集卷三に、「五月蠅成騒人々云云」]

澤村長十郎 扇屋の仲居のまんがあつたら男をやがて大阪へ下り船(女腹切)

澤村長十郎は京都官川町の生れであるといふ、正徳享保の名優である。正徳三年の春芝居に京都から大阪に下りて光山座に勤めを記して「京で、僧形の人に續くは無い、久振にて難波津にかへり花、冬ごりの顔見世のなり大名に則いなり介と成」と見えてゐる。序云、この文は長町女腹切の初上演年月を考證する材料となる。

さびあゆ 相模川のさびあゆ漁つて一獻酌(まんと大隈虎)

「舟船」が秋季産卵期になれば體色銅色となる。これを荒船と云ふ。

**\*さびいなし** 篋同前のさびいなし、  
反を打つて何とする(加増曾我)  
〔蒲鉾〕赤鯛ともいひ、錆びた鈍刀のことにいふ。鈍刀。

**\*さびつきげ** 錆月毛の馬にふくみ  
轡を懸けさせしは(世繼曾我) 錆月  
毛の馬の尾鬣あくまで縮みたる  
に(五人兄弟)

〔錆月毛〕馬の毛の名、赤錆色を帯びた月毛  
(蒲毛)の少し赤はみたるもの。

**\*さぶ** 武藏の國の住人平山の武者  
所季重参りさぶといふ儘に(大原國  
笈) あつぱれ駿足御馬さぶ、何れ  
の牧よりひかれしぞや(源義經)

〔さぶらふ〕候の約(さぶさぶ)をも併せ見よ。  
〔敵血〕支那春秋の世には魯盟に牛の血を敵つ  
て信を結んだ禮記注疏に「凡盟者既詔而割  
牲左耳、以醢盤王敬、盛血、爲敵書、書成  
諸侯共敵、以讀書而理之、言使背盟者  
如以此牛也。和漢三才圖會に「盟、敵血以  
結信也、春秋諸侯會盟、則牲敵血云云。

**\*さぶらふ** 糺の森より放免雑色具  
したる勇士つとと出で(弘徽殿)

〔雑色〕雑役庶吏を勤める者。雑人。「さつし  
き」ともいふ。有位の者は相當の服色あれど、  
無位の者は定まつた色がない、故に位なく  
雑役に従ふ者を雑色といふ。伊勢貞丈は、色  
は服色の義でなく、人品の義、雑役に勤める  
人品をいふといつてゐる。

**侍異利** 神八幡侍異利他言せま  
じ(天網島) 敵を討たせ申さん爲召

連れ立退き候、侍異利僞なしと言  
ひければ(大獲虎)

侍が自誓の詞。「せらせらみやうがを見よ。  
\*さへ(へ)に。させぬさせぬと割込ん  
で、ひよろつく足を踏みこかさ  
れ、さへ人踏んだな堪忍せぬと、  
相手がどれやらめつた撲ち(生玉)  
山の芋は鰻になる、喧嘩のさへ人  
筆になる、結ぶ縁こそ不思議な  
れ(天神記)

〔支人支へて裁く人の義、仲裁人。  
\*さほひめきみ 春のつかさの 佐保  
姫君、霞の衣常流仕立(雲女)

〔佐保姫君佐保姫とも云ひ、春の神。古事記  
傳に「後世秋の歌には立田姫をよみ、春の歌  
には佐保姫をよむ、是奈良の京の頃より言出  
でたるべし、立田は京の西にありて立田姫と  
申す神あるに對し、佐保姫は東にあるを以  
て設けたるならん」と見えてゐる。

**\*さま** ぎえん直しに酒にせう 毛氈  
敷けと、勇んで見てもどこやらさ  
まが明檜の、底の心は澄まざりけ  
り(流鏑) あれなる櫓のさま蔭に人  
影の見えたるは駿河の守に極まつ  
たり(今川了俊)

〔狭門〕透門。城の櫓や扉に窓を明けて外を望  
み矢九を放つその窓をよぶ。  
\*さまたかへし うたせたい馬さまた  
返し、手なぐだき心なぐだき并節  
〔小股返〕相撲の手の名で、掛十二手の一。相  
手の股間に足を踏込み手を内股へかけ、體  
と共に吊上げて投出す手。

**\*さみず** せがれ瀧口・上の御仕置を  
待たず、遁世せさせしなみずする

と覺えたり(娘)

〔彌次みずの義、毎歳す。あなご。

**さむらひみやうり**

〔さむらひみやうり〕を見よ。  
\*さまさうず 早廣も叶はじと散散  
に落ち失せず、おおさまさうず  
是までと歸丸

さまさうず。まさこ然るべきである。  
\*さもし これは重代の左文字、二千  
五百貫の折紙あり(反魂香)

〔左文字〕南北朝の頃筑前博多の刀工鍛冶左衛  
門三郎作の刀をいひ、銘に左の字を刻んであ  
る。左衛門三郎は正宗の弟子である。左派の  
者に元應、安右、吉貞などの名工がある。

**\*さもし** 世につれるとはいひひな  
がらさもししい心にならんした(丹波  
興作) ええさもししい騙め、やい銀  
がほしくば穢い言懸りせうより奇  
麗に家尻切れいはい(生玉) 母こそ  
は夕霧、父御はそれ藤屋伊左衛門、  
さもししい人と思ふるな(夕霧) 義貞  
程の大將が、さもししい返報受けう  
とて何の情をかけられう(女椿)

心根の淋しい義。あまましい。心ぎたない。  
謡曲「長流に「さまうしや方方、源平互に  
見る目も恥かし」とある「さまうしや」は「さ  
もしや」を延べた詞である。

**さや** 下に郡内照羽二重 縞の羽織  
に沙綾の帯(天網島) 見世の帳面皆  
ぬめりんす、らしやも無い事いば  
しやりんすの、はや人魂も飛さや  
抜いて、共に刃の諸羽二重

〔沙綾〕葡萄牙語の紗(西班牙語の紗)即ち  
サアヤの略で、布帛の織である。巾の形をく  
づいて連れた模様や其他種種の模様を現はし  
た織物の絹織物。「飛さや抜いて」とあるは、  
花文綾その條を見よに絹をちひかけた。

**さやなり** 跡のこじりの帳面のつば  
め合せと、親方がさや鳴するぞ道  
理なり(女腹切)

〔箱鳴〕刀身が鞘に適合せず振れは音のするこ  
と。ここの文は箱鳴に(箱鳴)即ち家に響渡る  
程怒鳴かきをいひかけたのである。

**さゆる** まづ言譯を御聽きと、たつ  
てさゆれば姉のお種、さあ言譯が  
立たぬからはこの度け命を取  
る(堀川波鼓)

〔さふる〕(障)の訛。おまへしつめる。とどめ  
る。堀川波鼓のこの少し前の文に「取さへて  
たべ人人とある「取さへ」も「取障」である。  
「さふる」を「さゆる」といふは、「うるたふる」  
をうるたふる」といふ類である。

**さよがらし** 六軒町のさよ格子、唐  
の聖人の宣はく、色の徳には隣あ  
り重井筒、稍静まれるさよ格子、  
市郎右衛門は立歸り軒の下にてし  
はぶけば、お鳥はそれぞと二階の  
窓(二枚繪)

〔小夜格子〕青樓の二階窓の竹格子をいふ。濱  
松園園録「南水邊遊に「島之内六軒町といふ  
は塗屋町なり、重井筒の船文中の巻に、月は  
はやわたりぞめて中橋や六軒町の小夜格子  
とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ。小夜格  
子の小夜は、娼家の店は格子作りであつたも  
の、小夜枕、小夜鳥、小夜蒲團などいふ小夜と

の(水明日)  
〔沙綾〕葡萄牙語の紗(西班牙語の紗)即ち  
サアヤの略で、布帛の織である。巾の形をく  
づいて連れた模様や其他種種の模様を現はし  
た織物の絹織物。「飛さや抜いて」とあるは、  
花文綾その條を見よに絹をちひかけた。

同じ語であつて、蓋し娼家の店格子を小夜格  
子と稱したまでである。

\*さらさうじゆ 祇園精舎の鐘の聲、  
諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花  
の色、盛者必衰の理り(淨常盤)

〔沙羅雙樹〕沙羅は梵語(Sala)、堅固と譯す。  
沙羅樹は東印度原産の甜腦香料の喬木であ  
り。葉は大形で互生し、卵狀長橢圓形で端尖  
である。古昔拘尸那城羅城外に沙羅樹林があ  
つて、其中の四株は特に高く、相對して雙を  
なしてゐたので沙羅雙樹といふ。釋尊其間  
を遺教を説き遂に涅槃に入られた時、雙樹は垂  
れ覆うて白色に變じたといふ。華嚴首楞に、  
「沙羅雙樹、爾時爲高遠、其林森鬱、出於餘林、  
涅槃經に、爾時世尊沙羅林下寢臥寶牀、……、  
其樹即時燦然變白猶知白鶴、枝葉花果皮幹  
悉皆剝烈墮落、漸漸枯悴摧朽無餘。」〔祇園  
精舎〕を見よ。

さらさかぶる さらさ禿がしるべ  
さらさかぶる さらさ禿がしるべ

〔更紗禿〕徳川初期頃から西洋の貿易商人の手  
を経て更紗(幾何學的の中形花文である金巾)が  
我國に渡來し、後には我國にても染出し、正  
徳頃は遊里の禿(その條を見よ)などにも更紗  
の着物が流行した。さらさを更紗と書くは昔  
借字であつて、西洋の貿易商人から我國人に  
傳はつた語であるが、語原はこの布の製産地  
である印度のサラータ、或はスラーダであると  
云ひ、或は瓜哇語のセラサから出た語ではな  
いかとも云ふ。瓜哇語のセラサは撒布の意で  
あつて、花などの模様を撒布するといふ意か  
ら出来た名であらうかともいふ。

\*さらし 面も恥も名もさらしの宇  
治の里(雪女)

〔晒〕面も恥も名も晒すに、宇治の里は晒布の  
有名な地であるから、「さらしの宇治の里」と  
いひかけたのである。

\*さらりん 吹出す烟は沙羅林栴檀  
の霞と變じ、三寶供養の燒香とな  
つて(歌念佛) 沙羅林の夕の煙消え  
残る(用明天皇)

〔沙羅林沙羅樹〕さらさうじゆを見よ  
の林。

\*さりようこ 右龍虎・左龍虎討取つ  
て(天國島)

〔左龍虎果林子作國性爺合戦の九仙山の中  
に見え人物である。〕樂喧流は珍しからず  
云云の條、及び假人名部に就いて見よ。

さるがく 法談讀誦管絃の聲、猿樂  
田樂伎樂を奏し(賀古教僧) 猿樂狂

言の笠の下のまなび(源義經)  
〔猿樂〕さるがう(即ちさるがく)散樂の稱  
である。猿樂の能は鎌倉將軍の世に起り、足  
利將軍の世に盛行はれた。能の間の狂言は  
この流れである。觀阿彌世阿彌の父子狂來  
の猿樂に田樂の能や諸の舞などを折衷綜合し  
て謡曲を起した。〔猿樂狂言の笠の下〕と  
は、笠の下の條を見よ。

さるせ 引摺る雪駄の金にあかした  
夜裝束、各・さるる。ぜ・羅紗・すため  
ん・かろ・さい・らんけん・縷子・天鷲  
絨(博多)

〔羅紗〕Sera(英語ではSera)である。  
葡萄牙語Sera(英語ではSera)である。  
舶來の毛織物をいひ、現今はセルと云ふ。

\*さるぢや 何ぢや女の猿智慧(生玉)

〔猿智慧〕さかしかうて淺はかな智慧を猿の智  
慧に喩へた語。小才小淺。

さるのこしかけ 猿縛に絡げつけ、  
猿の腰掛にしてくれんと(松風)

〔猿の腰掛〕猿の末廣とも云ふ。「猿の末廣」を  
見よ。

さるのことり 冢の焼皮・熊の掌・狸  
の澤渡・猿の木取(天神記)

〔猿木取〕猿の手足をいふ。庭訓往來五月の  
文に「熊掌狸澤渡猿木取云云」と見えて、  
永井如瓶の譯解の註に、「熊掌・狸澤渡・猿木  
取、いづれも皆手足の事也」とある。

さるのすゑひろ 琵琶の撥をぞ出し  
ける、山樵ども集りて、すがたは

銀香の葉の形にて扱も合點のいか  
ぬもの、これは猿の末廣か(舞丸)  
〔猿木取〕猿の腰掛とも云ひ、菌類であつて樹  
木に生じ、半圓形の扇状をなす。

さるのひとと(并筒) 小鷹の羽おり。猿  
の一飛・夢枕(弁荷)

〔猿一飛〕相撲の手の名で、総十二手の「一」た  
ちがんを見よ。

さるのぼほ 花の三月よけぬれば皆  
吉日ぞ、その外に思ひは申の目猿  
の頬(槍舟)

〔猿頬〕罷置に「猿の頬笑(自らを知らなかりで  
他を笑ふ喩で、日本振袖始の第一段にも、「こ  
れこれ誤なし」とは猿の頬笑ひ、身の上知らず」  
とも見えてゐる)といへば、その意を含め、  
頬に方をいひかけたのである。この文に  
「花の三月よけぬれば」とあるは、花の三月は  
散る縁とて、婿歸には縁起悪く、また「甲の  
日甲の方」は、甲が去るに通ふから婿歸には  
忌むのである。

さるぼぼ 嫁菜・さるぼほ・恥觸の吸  
物(酒呑童子)

〔猿頬〕蜘蛛。蜘蛛類中の同姓類に屬する貝。

さるわか 曾我兄弟は古今無雙の  
つばものと御一言が嬉しさに、こ  
の蠅のやうな奴等に繩取らせ、五  
郎丸とやら云ふ猿若に首打たる  
る(虎が屠)

〔猿若〕歌舞伎の猿若(猿若の稱は中村勘三郎  
の猿若狂言より起つたといふ)の眞似をして  
演る(人倫訓蒙圖彙所載)



〔若 猿〕

さるまじく 呦呦と鳴くさを鹿  
の(會稽山)  
〔小牡鹿〕さは接頭語、牡鹿。  
さをもり 〔さ(鹿)を見よ。〕

さん 死ぬるは二人がかれての覺悟、養ひ親にさんもつかず、在所の親の遺恨もなく(晋庚申)

〔晉繪畫の上にその繪畫をほめて評した詩文を撰といひ、轉じて批評また惡評の意にいふ。井原西鶴撰好色二代男(貞享元年刊)卷に、親の顔は見ぬ初夢の條に、「出口の茶屋に懸掛けながら、朝歸りの客に賣つくるに一人も違はず、亭主横手を拍つて、いかに彼は蠅の材木屋殿、其次は鳥羽の米屋の手代なり、見立ての如くかこひを買ふ男ちやと大笑して。」

さんあくしゆ 「しよあしゆらとうございだいかいへん」を見よ。

さんいんぶつしやう 三因佛性の中には縁因殊に量りなき、佛の縁やいつとなく(用明天皇)

〔三因佛性〕正因佛性了因佛性縁因佛性を云ふ。正因佛性は諸法實相の理體であつて、一切の衆生が悉く具するものである。了因佛性は諸法實相を了知する智慧をいひ、縁因佛性は諸法の善根を云ふ。了因佛性と縁因佛性とは人間でなければ成就されない。以上三佛性を具して成佛得道することができるのである。詳しくは涅槃經・師子吼品を見よ。

さんさん 三衣の罰も恐しく(薩摩歌)上人三衣をあらため既に法事と見えし時(小栗判官)

〔三衣佛弟子の著する三種の法衣、即ち大衣・七條・五條をいふ。釋氏要覽上に、「蓋法衣有三也。一僧伽梨(即大衣也)、二罽多羅僧(即七條也)、三安陀會(即五條也)。僧祇律に、「三衣者留聖沙門之標幟也。」「三衣の罰も恐しく」とは、法衣を着た身に色袴に迷ふやうでは佛罰も恐しいといふ意。

さんがい この三界の衆生は皆、

れ我子と聞く時は(重井簡) 三界の教主世尊の御事なり(卯月潤色) 三界の捨子となり(博多) 三界を探しても我子と云うては是ばかり釋迦(三) 三界のなほ首枷と十二段) 我は是より三界坊(女夫地)

〔三界〕色界・色界無色界を云ふ。三界はいづれも有漏の迷界なれば、染著即ち現世の意に云ふ。「この三界の衆生は云云はそこの條を見よ。」「三界のなほ首枷」は「げにや世世ごと」の云云を見よ。僧となつて三界に迷へる衆生を救済濟源するを三界坊と云ふ。

さんがい 山も見えざるかりそめ

〔江戶〕さんがいへ往かんして、何日もどらんす事ぢややら(舟波與作) いかになつたらすればとて何時の便宜に唐三界、餘りなかせぎぢや(國性通) 名物のお家の道具京さんがい質に置き(寢體) 裏屋・背戸屋・寝食屋さんがい懸取に歩くやうな勤するのも澤山に逢はう(爲(生玉))

〔三界〕界隈。邊。三界は多く名詞と複合語となつて用ゐる。この語蓋し前條の轉錄であらう。「江戶三界」「東京三界」「南洋三界」「師三界」「櫻實屋三界」「觀音三界」「他國三界」など用ゐられ、また助詞「の」を挿み、三の三界などとも見えて、「山も見えざるかりそめに云云」はその條を見よ。

さんがい 黄金の辮・珊瑚の鞍・おしかげ・三懸・腹帯・捺縮め(釋迦)

〔三懸〕三懸とも書く。鞍、朝、縮を合せて三がいと云ふ。「がいはかき懸の音

便である。「おまがいは馬の頭から辮に懸けた辮、「むながいは馬の胸から鞍橋に懸けた辮、「しりがいは馬の尾から鞍橋に懸けた辮を云ふ。

さんがい あれ母様の怖い顔、爪も長うなつた怖い怖いと、泣く聲に母も驚くさんがい、一念覺めて顔面も柔和の相とぞなりにける(百合若) 男を害し其妻を娶る畜生さんがいのこのからだ、焼くな埋むな(女夫地)

〔殘害〕ちくしやうさんがいを見よ。

さんがい 三蓋笠の印立てたる葎打上げて(銚合歌)

〔三蓋笠笠紋所の名。大中小の菱形を三段に重ねて其外廓を取つたもの。この文は、三蓋蓋に菱をまかせたのである。〕



さんがい 此界ばかりか三蓋菱、幾夜も幾夜も揚羽の蝶(賀古教信)

〔三蓋菱紋所の名。大中小の菱形を三段に重ねて其外廓を取つたもの。この文は、三蓋菱に菱をまかせたのである。〕

さんがい 三網五常の道踏みたが(へぬ足の袴(唐船新))

〔三網〕君臣父子夫婦の道をいふ。君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱である。網、交はう、よつ引きちやうど放せば過たず、龍馬のさんがうすばと射ぬかれ(關八州)

さんがい 三萬三譯と書かれてゐる。馬の目から鼻に至る間の譯の如く凹まりたる所の稱。

さんがい 算用算勘存ぜれば(寢體)

〔算勘算解勘定。算術。〕

さんがい おのれば正しく髪を剃り三歸五戒を授けて、今日新談義の高座の上、色に溺れて還俗とは五郎に優る大悪人(五人兄弟)

〔三歸〕佛法僧の三寶に歸依すること。三歸と五戒とは佛道に入る者の最初に受ける戒である。

さんがい 左程まで姉姪妹殺したいかいの、ええほんに人のさんぎいひつうは無けれども、心と素性を顯すの(弁簡) さんぎさんび六根罪障(虎の唐)

〔顯佛〕自ら罪を著するを顯と云ひ、これを人に對して發露するを愧と云ふ。過去の罪惡を著して後悔するを懺悔と云ふ。懺悔懺悔は佛道修行上の要素である。大愛經に、「懺悔者業盡之衣服。」「人のさんぎいひつうは無けれども」とあるは、人の恥辱を言ひたははなれども」の意である。

さんがい 破新袴は三去の一つを見よ。

さんがい 三皇五帝三皇は伏羲・神農・黃帝、または天皇・地皇・人皇を云ふ。五帝は少昊・顓頊・帝・堯・舜、または伏羲・神農・黃帝・堯・舜を云ふ。

さんがい 祈らずと云ふ佛もなく、三光天を拜むとて(大經師)

〔三光〕日・月・星。二中歴に、「日・觀世音菩薩觀光、月・得大勢作名月、星・虛空藏觀普光。」

さんがい 赤旗を眞先に押立て、三軍心を一致にして親が進まば子も

赤旗を眞先に押立て、三軍心を一致にして親が進まば子も



觀世音菩薩は三十三身の者を濟度する爲に三十三身に化現されたこと法華經・普門品に見えてゐる。三十三身とは、(1)佛身、(2)辟支佛身、(3)聲聞身、(4)梵王身、(5)帝釋身、(6)自在天身、(7)大自在天身、(8)天大將軍身、(9)毘沙門身、(10)小王身、(11)長者身、(12)居士身、(13)宰官身、(14)婆羅門身、(15)比丘身、(16)比丘尼身、(17)優婆塞身、(18)優婆夷身、(19)長者婦身、(20)居士婦女身、(21)宰官婦女身、(22)婆羅門婦女身、(23)童子身、(24)童子女身、(25)天龍身、(26)夜叉身、(27)乾闥婆身、(28)阿修羅身、(29)迦樓羅身、(30)緊那羅身、(31)摩睺羅伽身、(32)人非人身、(33)執金剛神身。

### 三十三天 (天神記) (持統天皇)

初切天のこと。金剛經の註に、「須彌山在四天下之中、爲三山極大者、故名三山王、日月過之山而行以爲晝夜、由之而分四面、爲四天下、其山頂有四峰、每峰八天、共三十二天、帝釋居中以爲三十三天」。

### 三十七尊 (廣御)

金剛界の九會曼荼羅の翔摩會上の佛菩薩の中の主要なるものを提擧して三十七尊と云ふ。即ち五佛、四波羅密菩薩、十六大菩薩、八供菩薩、四攝菩薩である。

### 三十二相

外道の元祖提婆達多は如来の三十二相を學び用明天皇。思ふ殿御に添はれぬからば三十二相もいらねども(天智天皇)

佛や輪轉聖王はその身に三十二相を有し給ふと云ふ。大藏法數に、「謂如来應化之身具此三十二相、以表法身兼德圓融天人中尊衆聖之王也。三十二相は即ち、(1)足安平相、(2)千福輪相、(3)手指纖長相、(4)手足柔輭相、(5)手足皴網相、(6)足跟滿足相、(7)足趺高好相、

(8)腦如瓶王相、(9)手過膝相、(10)馬陰藏相、(11)身縱廣相、(12)毛生青色相、(13)身上上廣相、(14)身金色相、(15)身光面各一丈相、(16)皮膚細滑相、(17)七處平滿相、(18)兩腋滿相、(19)身如獅子相、(20)身端直相、(21)肩圓滿相、(22)四十齒相、(23)齒白齊密相、(24)四牙白淨相、(25)頰如獅子相、(26)咽中津液得上味相、(27)廣長舌相、(28)梵音深遠相、(29)眼色如金精相、(30)眼瞳如牛王相、(31)眉間白毫相、(32)頂肉髻成相、(33)髮垂守護の神で、毎月三十日を毎日一神ずつ來現して守護し給ふと云ふ。この説も天台に起つて日蓮宗に傳はる。三十番神は書によつて異同あれど、その説を擧げれば、朔日、熱田大明神、二日、諏訪大明神(信濃諏訪郡)、三日、廣田大明神(播磨瀨野郡)、三日、廣田大明神、五日、氣多大明神(能登羽昨郡)、六日、鹿島大明神(常陸國鹿島郡)、七日、北野天神、八日、江文大明神(近江)、九日、廣前大明神、十日、伊勢大明神、十一日、八幡大明神、十二日、加茂大明神、十三日、松尾大明神、十四日、大原大明神、十五日、春日大明神、十六日、平野大明神、十七日、大比叡權現、十八日、小比叡權現、十九日、聖德太子權現(近江滋賀郡)、二十日、客入權現(近江滋賀郡)、二十一日、八王子權現(比叡山)、二十二日、稻荷大明神、二十三日、住吉大明神、二十四日、祇園大明神、二十五日、赤山大明神(比叡山西穂)、二十六日、健甕大明神(近江滋賀郡)、二十七日、三上大明神、二十八日、兵主大明神(近江野洲郡)、二十九日、苗島大明神(近江)、三十日、吉備津大明神、「恐しや三十番神ましまして云々」をみる。

てゐる(次朝日)

嵐三十郎をいふ。寶永七年には大阪の岩井座に勤めて、やつし方上白上の俳優である「あらし」をも見よ。

さんじふろくきん 九曜七星二十八宿五行の靈三十六禽を驚し奉り(弘徽殿)

(2)狸、(3)豹、(4)虎、(5)牛、(6)蟹、(7)龍、(8)蛇、(9)狐、(10)兔、(11)貉、(12)馬、(13)鴛、(14)魚、(15)蟬、(16)蛙、(17)蛆、(18)蟻、(19)猿、(20)猪、(21)羊、(22)鷹、(23)鷹、(24)狐、(25)狸、(26)猿、(27)鳥、(28)鹿、(29)雉、(30)狗、(31)鼠、(32)豺、(33)猪、(34)猿、(35)猪、(36)猪、三十六禽の靈は佛敎圖彙卷三に見えてゐる。

### さんじやう

お厄は我等拾ひ除け、四魔三障の祟はなし(喜女)

「三障」善心を起す障りとなり正道の妨となるもの三つある、即ち煩惱障(貪慾瞋恚愚癡等の障)、業障(五逆十惡等の障)、報障(地獄餓鬼畜生等の苦報障)である。語乘法數に、「三障」煩惱、業障、報障。

三常 「周書に曰く云云」を見よ。

### さんじやうこう

おんあぶら岸仲間

「山上講」の山上講、俗體ながら數度のお山(女殺)

「山上講」天和吉野郡金峰山藏王権現に參登する講中である。往時關西地方では山上講に參詣すること流行し、同志相集つて山上講を作り、參詣する道すがら法螺貝を吹鳴して咒文を唱へた。この文の「おんあぶら屋は、御油屋に喃阿毘羅をきかせたのである」とをあんあびらうけんを見よ。

### さんじやうだいふ

丹後の國由良の湊山樺太夫が買取つて、渡す道具は何ぞで弁筒)

「山樺太夫」山樺太夫また三庄太夫とも書く。村上大皇の延享年間奥州の太守御官將兵部を誅らして筑紫に驅逐した。將兵二子あつて姉を安齋と云ふ弟を對王丸と云ふ、母子三人父を尋ねて越後の直江津まで到り、融山岡太夫に捕へられ母は津波の二郎に、安齋と對王丸は官崎三郎に賣られた。三郎二人を中良の山樺太夫に賣つた。對王丸は山樺太夫の妾侍に堪へる事に對して、進出り江村國分寺の住僧に救はれ、清水寺に送られた。かくて後對王丸は上御佛津院の養子となり、天皇に請うて母を尋ね、母を尋ねて佐渡に會し、和江村國分寺を訪うて住僧の恩を謝し、山樺太夫父子を齋所に處したと云ふ。後世この事を海潮瑠璃小説等に仕組んだものが多く、山本角太夫の正本、志忠王丸もその一である。この所の文に「林清」に註記してあるは、日暮林清の創めた歌念佛の節で語ることを示したのである。林清は日暮八太夫の門人で、説經節から歌念佛を創作した斯道の名人であつた。「是は我實き對王殿を安齋姫丹後の國由良の湊山樺太夫が買取つて、渡す道具を取つて山と濱とへ流き別れ……」は歌念佛の文である、これによつて歌念佛の文が如何なるものであつたかがぼほ知れるであらう。「うたねんぶつ」を見よ。

### さんじじゆ

「さんじじゆ」(三從)である。「じじやう」の條を見よ。

### さんじじやう

三乘五乘七方便四種八部二十五有、皆く利益の甘露を嘗め(釋迦)

「三乘」乘は運轉の義。因人を載せて證果に運ぶ義をいふ意であつて、佛の教道を云ふ。三乘とは聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘を云ふ。よつて以て各迷界を乗出する三種の機類(衆生)をさす。

さんじじやう 三乘五乘七方便四種八部二十五有、皆く利益の甘露を嘗め(釋迦)

さんしょごんげん

「熊野三つの御山を見よ。」

さんしょのかは 辛い身過ぎの商あきむ

は山椒の皮 扱は鞍馬の火打あきむ

石(蛭賊天皇)

「くちまのさんしょのかはを見よ。」

さんじん 此度我等お暇下され世

の散人とはなつたれども(鶴羅三)

「散人閑散人。莊子：人間世篇に、「而無死之散人」とある散人は、世用たらぬ人の義である。」

さんすぬ あたりなきよるきよなる見

廻して、夏冬なしに涼しさなる山

水な住家と、ささやき合ふなほの

聞くにも母は悲しき恥かしさ(扇八

景) 引出物は少うても百づつは腰

についたものと思うたに、ええさ

んすぬ(五人兄弟) 身こそ墨繪

の山水男、紙表具の體なりと

も(反魂香)

「山水は極彩色の畫に比べて墨繪の山水は寂し

く蓋よりして、物淋しくまた身すばらしこと

にさふ。色道大鑑に「山水。物のさびたる

事にはさび、少分なる事にも云ふ、山水を畫き

たるはさびしき故斯云る歟。」

三寸繩 「繩三寸に繩上ぐ」を見よ。

さんせ 今宵の月に蹴殺され、三世

の諸佛の御罰を受け(重井筒) 助く

ると云ふ義理は三世に渡る衣の徳

(大經師) この前さる人に三世相見

てもらひしに、先生で佛前の茶湯

の茶碗打割りし報あり(生玉) 三世

明鑑理を照し、鏡にかけて説き給

さんせ(最明寺殿)

「三世」過去世、現在世、未來世。

「三世相」とは、卜筮の法や、佛敎の因縁説や、

五行生剋の理を交へた説で、人の生年月日や

人相などから考へて、其人の過去、現在、未來

の三世にわたつて因果、吉凶、善惡などを説く

ことを云ふ。三世相といふ本もある。

「三明明鑑」とは、過去現在未來にわたつて鏡

にかけたる明なること。

さんせう 飼ひに飼うたる月毛の

駒、前脚とつてかん強く雪嚙砕く

白泡に、さんせうつよしや尾は青柳

の、しつたりしたりしたしたした、

かつしかつしと歩ます(鶴羅三)

「三焦」「三焦善し」とは、馬の口角の色善きを

いふ。典據漢文「雜部」「さんせう」を見よ。

さんせのおん 先帝の妹宮梅檀皇

女にめぐりあひ三世の恩を報ぜん

爲(國性節)

「三世の恩」君恩をいふ。親子は二世の中、夫

婦は二世の契り、君臣は三世の縁と云ふ。

さんぜん 母常盤亡魂の恨をなだむ

るものならば、地獄變じしてせん

の樂となり父が成佛變じして(慶應)

「三焦」色界十八天の中なる四禪天の中、第三

禪天少光天、無量光天、隨光淨天を云ふ。こ

れを定生善地と稱し、深妙の禪定より身心

の快樂を生じ、涅槃經に、「有佛世界、名

曰不動、若有衆生、聞其華香、身心安樂、

譬如比丘入第三禪」

さんぜんせかい 提婆達多は八萬

法藏を讀み覚え、三千世界にあら

ゆる學問盡すとも、雖も(釋迦)

「三千世界」一切の世界。宇宙間には無數の世

界があつて、各須彌山を中央にして四洲四大

海日月等を備ふ。これ等の一團を千集めたる

のを小千世界と云ひ、小千世界を千集めたる

ものを大千世界と云ひ、更に大千世界を千集め

たるものを一大三千大千世界と云ひ、略して三

千世界と云ふ。

さんぞん 三族罪科にかゝるべ

し(國性節後日)

父(兄弟子孫)一説に父族、母族、妻族をい

ひ、周禮の註には父子、孫と見えてゐる。

さんぞんのらいがう 伊左衛門様、

源之助に妙順様を並べて、三尊の

來迎を拜みたうござんす(夕暮)

「三尊の來迎三尊とは阿彌陀如來と脇土の觀

音菩薩、勢至菩薩をいふ。念佛の功を積んだ

者は、臨終に三尊影向されて極樂淨土に運き

給ふと云ふ。この文は三尊を伊左衛門、源

之助妙順にあてたのである。

さんた 馬はさんたる如く、諸任

は仰向けにころびを打つて跳返し

(飛將) 所の奴か旅の奴か、慮外致

した御免あれと土につくばひさん

たれる(日本武尊) 尾を振つて手な

たとさんたして(加増我)

犬の後足を屈し前足を擧げること云ふ。足

新翁記卷三に、「三本は丁稚又は小僧など云

ふ下童の通稱なり、かの丁稚の狂ひまはる

まなびをせよと云ふ事なるべし」とあるが、

「さんた」は「さあ立ち」の戯略ではあるまい

か。但言集覽に「さんた。さんたとは犬の立

て前足を擧るをさする事也」

さんだいし集 ならの帝の萬葉集を

始め三代集、遊女の歌まみ見えた

り(三世相)

二代集古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和

歌集。三代續く奴風「あらし見よ。」

さんたいやう 講對揚の次第書、懺

法回向の祕密の書籍(實古教信)

「講對揚法會は散華の式を行ふ時、散華の儀

を終へてから、佛法世法の常行安穩なるを希

ふ偈文を擧げて佛徳を讃嘆すること。其儀式

の次第を畫いたものを講對揚の次第書とい

ふ。

さんだはら 漏さぬ底の心までとん

とあけたる棧俵、これ公家様の

御膳米踏むとは罰があたりか

も(松風)

「棧俵」米俵の兩端にある藁の蓋。

さんたふ 三塔に隠れなき長刀の

達者と(孕常盤)

「三塔」比較山の東塔(根本中堂のある處)、西

塔(釋迦堂、法華堂などある處で寶幢院と云

ふ)、横川(釋尊院、惡心院などのある處。山

門號に「一山有三塔」所謂東塔號本院、

西塔號寶幢院、横川號釋尊院」。

さんだん 「おさんだん」を見よ。

さんぢぢう (淨瑠璃文中の註記)

「三重」三名稱とも、聲明、明から出た語で、

三絃の調子の高い一種の響き方である。人の

聲音は三重の三重の調子で響かないので、

三重に合せて唱はれない爲に響かないこと

あれば、従つてその文句も略されることがあ

る。四座講式の聲明の書などには、初重、甲

二重、二重、三重などと註記してある。

(三重の他に、地、フン、ヲクリ、詞、舞など

も記入してあつて、旋律の大體を知られる

が、細かな節等は現今では殆んど其意味を失

はれてゐる。

さんづ 父繼信が幽霊白絨緘に白

直垂、風のまにまに面影は三づの上  
に颯颯して乗鎮め(源義経) 太刀  
を抜いて水底を切拂ひ切拂ひさん  
づにどうど乗下り(最明寺殿) 三づ  
にひらりと乗移り(鎌田)

〔三頭馬の尾の上で腰に當る處を云ふ。平家物語卷四、橋合殿の條に、鞍坪によく乗定めて鎧を強く踏め、水しよまは三頭の上に乗かれ。〕



**\*さんづのかは** 今六道の次傳馬、三途の河を打跨ぎ(丹波與作)

〔三途河〕三瀬河とも云ふ。蓋し三瀬道を河に喻へ、以て冥土にある河としたのである。佛説地持菩薩發心因緣十五經卷二に、「蘇頭河曲に於初江邊、官廳相連承所、前大河即是蘇頭、見渡亡人一名三奈河津、所渡有三大樹、一名衣領樹、影住二鬼、一名葦衣裏、二名三懸衣翁」。十王讚歌抄に、「此河に三の渡有之、故に三途河と云也。上にある渡をば淺水瀬と名付く、此は淺くして水陸を不逼り罪淺き者此を渡る也、中にある渡をば橋渡と名付く、此は金銀七寶の橋也、善人のみ此を渡る也、下にある渡をば強深瀬と名付く、此をば悪人のみ渡る也、此渡り流れ早き事矢を射るが如く浪の高き事大山の如し」。また、

**三條小鍛冶** いかなる猛き武士の、三條小鍛冶が劔にもなう貧苦の敵は防がれず(女補)

三條小鍛冶宗近は一條天皇の御宇京都三條に住んでゐた刀鍛冶の名匠である。三條小鍛冶

さんづのかは——さんばい

のこを作つたものに謡曲小鍛冶がある。  
**\*さんど** 來月二日出の三度(金子三百兩差上せ申すべく候(冥途飛脚) そちが商賣は三度でないか、身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として届けぬ(冥途飛脚) 〔三度〕三度飛脚の略。「さんどがき」の條を見よ。

**さんどがき** 商巧者駄荷積り、江戸(も)上下三度笠(冥途飛脚)

〔三度笠〕深菅笠である。三度飛脚が被つた笠なるによつてこの名稱がある。我衣に「貞草の頃より三度笠とて、飛脚馬上にて眠り落馬しても鼻を打たぬやうに深くしたる菅笠、旅人被る者多(近世風俗志所載)し。未保



近世風俗志(原名守貞漫稿)笠の部に「三度笠。大深とも云、菅笠の一種なり、誤つて落馬することある時面部を被せざる備載。又は四時風を防ぐを要す歟、此笠貞草中始(視聽色遊藝男所載)て製せし。文化以前は旅商人専ら用之、文化以來は置盆形の菅笠を用ゆ。冥脚(寄附)は今の三度笠を用ゆ。冥

途飛脚のここの文は三度笠に三度飛脚をきかせたのである。三度飛脚は元和元より、大阪城の定番の語侍等が東海道各驛の驛長等と相談して、其家談を飛脚とし



〔脚飛〕

て毎月三度日數八日を限つて東海道を往復せしめられた。後には大阪飛脚は其出發を毎月二日・十二日・二十二日と定めた。  
**さんどく** 神武智勇の名將三德兼備の威におされぬ(蠟虫姫) 〔三德〕智、仁、勇。和漢名數に「三德」智、仁、勇。

**\*さんどく** この結縁にひかれ繼母の三毒三善捉となり(冥古教信) 未だ三毒四慢の大虚に出でず(心五戒説)

〔三毒〕貪欲・瞋恚・愚癡の三つは吾等の不善行爲の根本となり、善心を毒害するを以て三毒と云ふ。智度論三十一に「有利三益我者、生貪欲、遍逆我者、而生三瞋恚、此結使不從智生、從狂惑生、故是名爲痴、三毒爲一切煩惱根本」。

**さんどらに** しよう てれめんていな。ばじりこんさんとらにいよう。萬能膏と、膏藥を名をいへば(大雑述)

羅術語Sungus Draconisの訳、譯して龍血といひ、昔血止薬として用ひ、その粉末は鮮紅なるである。かく神秘的な名を付けたるもの。棕櫚科多年生植物の省藤の果實の樹膠から精製したもので、膠狀又は球狀をなし、膠子の葉に包んで賣出し、現今は原料を齒磨製造の色付けなどに用ひられて、賦色料ともいふ。

**\*さんばい** 亭主ば御前へ丸裸でさんばいなりやといひければ(百合老) 木の葉を着たる荒法師雲に乗じ口より虹を吹く繪像、おおさんばい(佛様やと、一同に南無阿彌陀佛と唱へける(蛙合戦))

「無怖」の上方詞。見るに忍びないこと。類柑子(刊本)昌實の句に、「氣ちがひのさんばいとる鏡びて。小栗判官軍街道・第四段に、「敵のくふで。さんばい裸身で、何の用で誰を呼びにおふでなされた。和訓栞「むざむざ」の條に「さんばい」といふ俗語も慚なきなり。

**さんねつ** 娑羯羅龍王の威勢に壓され五表三執歌む事なし(松風)

〔三執〕龍蛇の三患を云ふ。即ちには惡風吹いて龍蛇の飾衣居所などを失うて苦惱をなし、三には龍蛇變樂の時に金龜鳥來つて龍蛇の子を奪ひ食ふ。これによつて龍蛇怖れ且苦惱をなす。この三執のことと法華文句に委しく載せてある。

**さんづ** 裾三のづまでひつからげ(三國志) 髪かきまげ裾三のづまでひつからげ(吉岡染) 曾根崎へたつた一飛一走と、尻三のづまでひつからげ(女殺)

〔三のづ〕三の脚即ち肋骨三枚目をいふ。圖は脚をさひ、胴體を圖體と云ふと同じ。蓋し圖は三のづである。「七のづ」の條を見よ)と云ふ。これは肋骨七枚目のことである。「二のづ」をも併せ見よ。果林子のこの文は、衣服の裾を肋骨三枚目の所までも捲り上げた意。

**さんばい** 死骸のさんばいむづかしと、兩足の骨腕の骨ほつきほつきと押折り(蘇我) 女の時とは格別にみさんばいよし心よし(日本武尊) 「さばき」(物の普通さばき)に「ん」の増加した語である。處分。處置。扱ひ。まがの平太(淨瑠璃第三)、「只なりとも垂せられど、女郎二人垂せ申すこの男一人では、中さんばいなり申すまじ」。



さんはいくほん 三はい九品蓮の糸

其曼茶羅はさもあらめ(賀古教信)
【三寶九品】極樂浄土の階級である。無量壽經に極樂浄土の果相を説いて上中下に分ち、これを三寶といひ、觀無量壽經にその各寶を上中下に分ち、總て九品とてある。よほんのじやうせしを見よ。靈寶の無量壽經略論に、「無量壽經中唯有三寶上中下、無量壽經中、一品分爲上中下、三寶上中下、合爲九品。」なほ三寶のことは無量壽經、卷下に就いて見よ。

さんばさもどき 鐵樂堂にけけか

り頭からさつと浴び、眼も鼻も眞黒に三ばさもどきな女中を見ても、やれ黒坊が出たわなう怖やとて(天鼓)

さんばそろう 常住酒で足ひよろつき

き、三ばそろうも高砂も皆狸の亂かと思ひます(飛騨)

さんばんんだいこ 三番太鼓つてんて

ん、天下は夜中八つ過(淀鯉) 與平は九軒を一足二足、三番太鼓打やみて廓淋しき折こそあれ(露門松)
【三番太鼓】眼の太鼓とも云ひ、これを相副に遊廓の大門を鎖すを法とす。三番太鼓の刻

限は時代により遅速あつて一様でない。寛永末年頃までは夜十時頃の刻限であつたが、その後次第に弛んで寛永五六十年頃には午前二時頃となつた。本領實業・新町大夫づの條に「かぞへかぞへてひふうみい、四つ夜中の太鼓限か、まだ大門のときはよきまき」とあるは、三番太鼓の刻限が四つ時(午後十時頃)なるを示し、淀屋出世遊廓の二の文に「天下は夜中八つ過」とあるは、三番太鼓の刻限が八つ時(午前二時頃)過なるを示すものである。播磨路連集に「廊中の大門をマ切事。寛永の末頃までは亥の上刻を以て限の太鼓打ちたりしに、夜まじ日まじに繁榮につく自然と深更に移り、何となく亥の下刻子の上刻と延引せり。」

さんぶぎやう これは浄土の三都經

とて(扇八鼓)
【三部經】無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經を浄土の三部經と云ふ。

さんぶつじやう 狂言綺語のたばふ

れも誑佛乘の因縁とばよくこそ、これを傳へたれ(百日曾我)

さんべいじまん まづ頭に置綿や三

平二滿の大口紅(日本武尊) お茶の間のきりかか五十餘の厚化粧、三平二滿の口紅(反魂香)

さんぼう 佛神三寶の守りめも切

れ果てた(水曜日) いかなる佛罰・三寶の冥加に盡き果てた(鑑權三) 御息は三寶護念の雲とたなびき(燈眼天童)

さんばだい この結縁にひかれ繼

母の三善三菩提となり(賀古教信)

さんぼんからかさ 三本傘・雪折

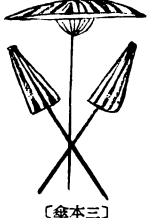
竹(五人兄弟)
【三本傘】夜討の名。夜討曾我(寛永古活字本)に「三本傘からかさ」とありて、この紋柄が載つてある。

さんまあさかげ そろを脇から二

くすじの三馬あさかげ凌ぎつ(大羅冠)

さんまい 浴外の三昧を夜な夜な

めぐる道心(蛾) またしてもまた



【傘本三】

しても火屋三昧に來ること

よ(賀古教信)
【三昧】三昧の略。墓所を云ふ。三昧堂を墓所に建てるやうになつてからは、俗に墓所を三昧と云ふ。「さんまいの義に就いては次條を見よ。往生要集・卷中十六道物語・餓鬼道の條に「また或は餓鬼あり、元より食物を求め得ざれば、常に三昧墓原に至りて熾き焦しめる屍を數ふ。」

さんまい 枕を枕に抱いて抱かれ

て念佛三昧(心三河白道) そこな馬子めも慮外者、武士の前にてすれざさんまいと、さんさんに叱らるる(丹波與作)

さんまいがた 南無三枚肩見送り

て口をあいてぞあきれたり(淀鯉) 民部の省教房は古乘りし三枚も身は一枚の夏衣(賀古教信)

さんまいかぶと 僅銀子三枚兜、拾

うて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と(吉野郡女楠)

さんまいがた 三枚肩見送り

【三枚肩】三枚肩と云ふ。この文は南無三寶を三枚肩にいひかけたのである。「三枚」は三枚肩の略。

いひ、五枚なるを五枚兜といふ。この文は銀子三枚を三枚兜にいひかけたのである。

さんまいせい 三まいせい七つづやと二文張りをつた、まつかせとつく程に手の内に残つたはたししか七文、南無三寶しををつた、一文はれて六文にして、當て取らうと思つて、一文しやんとくろめて突いて見たれば、悲しやんの八文であつたもの、一文はれて七つにして彼奴が壺へあてがうた(丹波與作)

「三枚爲り」であつて、この文はかかるたの三枚博奕をしたのではないけれど、博奕をするに口走つた掛聲である。本朝藤原氏(寶永六年刊)巻三に「かかるたの三枚と申すなごきまより、賢と申す博奕にすめられ」と見えてあり。丹波與作のこの文は、けんねじ博奕をなしたもので、與作は六文握り、八文は二文握つて、拳を突出し、與作は八文が空拳を突出したものと思つて六文といひ、八文は七文といふたので、與作思ひなほして八文は一文握れるものと考へ、己が握れる六文の中一文をこまかし五文にして、互に手を開けば兩人の握れる和七文となつて、八文の勝ちとなつたが、若し一文與作がくらめなかつたら、八文で勝負なし、與作の負けにはなかつたと、與作が逃獲するをいうたのである。

さんまやかい 三摩耶戒の脇當(大維冠)

「三摩耶戒」眞言宗にて行ふ一種の戒法である。「三摩耶戒の脇當」は、佛力の籠つてある脇當の意。

さんもんめ 思へばくやし斯うせいでも三奴では、あの頬をうつつけた事と思ひやせん(二枚繪)

さんまいせいと—じあひ

「三奴」(しは)をの條を見よといふ見世女郎を買ふ科金である。好色一代女巻二、分里歌女の條に「まづ三奴取はまの賜しからず、客あがればゆたかに内に入、其跡に木綿着物着たる亮が床取る中、紅の布圍...、同じ見世の女郎ながら、これにたよる男もむしやうなる野人にはあらず、遊び過ぎて揚屋の門を關に通る男、又は内露のよき人の手代か、武士は中ごしやうの掛るものなり」。異林子のこの文意は、三奴出しまへすれば立派に見世女郎を買つて、憎き明石の貞の面當に向を張つて茶屋遊びができるものを、お島が戀しいばかりに馬鹿げた事をしたと、お島から思はれるであらう、思へば残念な意である。「頬をうつつけたは頬打(即ち面當)に「うつつけ」(頬)をいひかけたのである。

さんり 足にさんりのさしもぐさ(曾我扇八歌) 身は三里の灸が痛む(持統天皇歌軍法) おつとまかせと足軽く、走る三里の灸よりも小判の利ぞこたへける(冥途飛脚)

「三里灸穴」の名。膝頭の下の外方の凹き處を云ふ。三里の灸は氣分を輕うする效驗がある。と云ふ。十四經絡雜考・卷中に「三里在膝眼下三寸、斬骨外大筋内宛宛中」。明堂灸經に「男子三十以上、不可灸三里、三里所以下下氣也。徒然草・第四百八段に、「四十以後」

さんろ 山路が吹きしは草刈笛翁



義經) 柏木の鞠・山路が笛、古今その品かかれども、皆これ戀路の寄櫃(歌念佛) などと鳥様、今日のさんろの道行は本で語ると直に聞くと又格別(二枚繪)

山路用明天皇人鑑にある人物である。花人親王が玉世姫を戀つたなり、山彦王子の亂を避けて玉世姫の父の豐後國野の長者の内に養はれ、山路と養名して草刈となり、草刈笛を吹いて一時世を忍ばれた。山路の道行は、用明天皇人鑑にある山路玉世の姫道行を云つたのである。假作人名朝花人親王をも見よ。序云、異林子が脚色せる山路のことは、鳥帽子折の草子に、用明天皇が御身を養ひ草刈童となつて、細名を山路といはれ、豊後に下り眞野の長者の内に牛飼となられて、長者の娘と結婚されたことが書いてあるに據つたのであらう。そして山路の名は、紀の寮名が暮春遊覽の賦の序に「山路日暮備、耳者機歌、牧笛之聲、などあるに據つた名であらう。

さんろ 法相三論華嚴天台眞言五箇の大聖は左の方に着座ある(大原因答)

「三論中觀論・百論・十二門論を三論といひ、佛一代の諸經を通論せるものである、これ等三部の論を三論」として、嘉祥大師の開宗にかかるとの三論宗と云ふ。

さんろ 御外威のしたしみ散位紀の有常(弁備)

る。彌勒下生經に、彌勒菩薩の説法の會座に三あつて、初會に九十六億人、二會に九十四億人、三會に九十二億人を度される由を記してある。彌勒菩薩出世して三會の説法する時を三會の説と云うたのである。彌勒下生佛經に「初會爲説法、廣度諸賢聞、九十六億人、令出三煩惱障、廣度諸賢聞、九十四億人、令渡無明海、第三會説法、廣度諸賢聞、九十二億人、令心善調伏、云云。

折しも村雨立出でて、これは楊弓雙六の勝負に賭くるおあしならんとありければ、司の前聞き給ひ、いやいやに候はず(松風)

「字」鏡。文と字とを同一に見て、鏡を文といへば、よつてまた字を鏡のことに云うたのである。「いちじ」をも見よ。(序に云、古昔殿上で殿上人が小弓雙六などの勝負を争ふ時、その賭物に鏡を出すのが故實であつたことが、増鏡おどりの下、水無瀬御殿の御遊の條下に見えてゐる。

しあく 國家の政道四惡を屏け(安夫池)

「四惡」(しあく) 暴、賊、有司。論語堯曰篇に「子張曰、何謂四惡、子曰、不教而殺、誣之虐、不威視、成謂之暴、慢令致刑、謂之賊、不與之人也、出納之吝、謂之有司」。\* じあひ 仕直に遣つたらば多分晩のじあひにならう、歸らぬことは悔まぬもの(水朝日)